発表形式で、『平家物語』後半の場面を「読む」

— 人間群像と物語の流れをとらえる試み

元 長野県岡谷東高等学校 齋 修

教科書掲載の『平家物語』と全体像理解

平家物語は、十二世紀、とりわけ治承・寿永の乱での人々の共通の経験をもとに、歴史の変動とその移り変わりの激しさの中で、抗いがたい運命を生きた人々の姿を描いている。運命を主題とした解釈では、知盛を中心とした人間群像を群読劇にした木下順二の「子午線の祀り」が、その特質をよく表わしている*。ただし、教科書で読まれる場合は、石母田正の指摘のように戦前から断片的に合戦記を中心に読まれることが多く、戦記文学ととらえる評価があった*。

「言語文化」の教科書にはすべて「木曾最期」が採られている。「古典探究」では、どの出版社の教科書も「鶏合 壇ノ浦合戦」から「能登殿の最期」までの章の、いずれかの場面を採録している。その中でも、能登殿（平教経）の奮戦場面を主に採録した教科書と、「先帝身投」での二位の尼（平時子）と安徳天皇、知盛に焦点を当てた教科書とに特色が分かれる。後者の場合、知盛と二位の尼の二人が、抗うことのできない歴史の勢いの中で、一門の運命を見終えそ

れを厳粛に受け止め最期をとげる人物として描かれており、そのことの読解が中心となると考えられる。その場合、壇ノ浦での滅びの場面から遡って平家の衰運とそこに生きた人々の群像を、流れの中で読み取ることがつぎに期待される。（「建礼門院右京大夫集」との関連からも）だが、終局に至るまでの流れを、個々の場面の理解を通して全体として把握することは授業においては難しい。

そこで、壇ノ浦を終極点とした物語のそれぞれの場面を、登場する人物群像を中心にピックアップし、それぞれの行動を問いかたちでテーマ化し、物語後半の流れを把握することを目指す授業を構想した。たんなる合戦記ではない平家物語の後半全体へのアプローチである。

学習者は登場人物と場面を選び、その中で人物がどう行動したか、その理由と心情とを考察しまとめて発表する。そうすることで七巻以降の物語の流れと個々の人物の行動とを結びつけて考え、学習集団で共有することを目指した。

授業の概略

授業計画

1 「先帝身投」（この部分の採録は、数研出版ほか、「二社」と、「内侍所都入」の冒頭にある知盛入水の場面を読み、現代語訳と解説をする。すぐ前の、船の上を掃除し始める知盛を描く場面も含む。それを見て二位の尼が最期を察し、覚悟を決め安徳天皇とともに入水する場面。

〈3時間〉

2 生徒が七巻以降の中からそれぞれ登場人物と場面を選ぶ。その部分の本文を読みテーマを絞り、人物の行動と心情を考察しまとめる。

テキストは対訳と索引のある『新編日本古典文学全集』（小学館）を用いた。生徒四〜五人ごとに一冊を用意するため相互貸借を活用した。

〈3時間〉

テーマの候補は、参考のため次のように示したが、他のテーマや人物を選んでよいとした。① 木曾義仲は、都に攻め上るときどんな理由を掲げたか

② 平家一門の長、平宗盛はなぜ都落ちを決断

したか

- ③ 都落ちの時、平維盛はなぜ妻子を残して都落ちしたか

- ④ 薩摩守忠度はなぜ都に引き返したか

- ⑤ 高倉天皇の四の宮（後の後鳥羽天皇）は、なぜ安徳天皇がいるのに天皇となったか

- ⑥ 義仲と今井四郎は戦の最後になぜ落ち合ったのか

- ⑦ 平知盛は一ノ谷の合戦で息子知章を失う。そのときの知盛の心情は

- ⑧ 壇ノ浦の合戦での阿波民部重能の裏切りの理由と、知盛が後悔したことは何か

- ⑨ 平知盛が死ぬ前に言い残した言葉は、平家物語全体でどんな意味を持つか

- ⑩ 平宗盛親子は海に飛び込んだ後どうしたのか

- ⑪ 建礼門院は大原で自らの過去をどう語ったか

- 3 二人一組で、リレー形式で生徒全員が発表（2時間）

評価基準

- 1 参考資料や巻末索引を用いて、テキスト全文から目指す人物や場面に該当する本文を探し、テーマを絞り込むことができたか。

- 2 個々の人物たちがどう思い、どのような行動を取ったかを全体とのつながりの中で考察しまとめられたか。

- 3 歴史の勢いに抗う人物群像の理解を通して、

物語全体の背後にある思想（王法といえど

も仏神に抗うことのできない人間の運命、など）を理解できたか。

- 4 本文を読んで描かれている内容を理解し、それに基づき感想や考えをもつこと、また、その根拠となる本文や事実との関係を簡潔にまとめ、発表することができたか。

授業の実際

ここでは授業計画2・3の学習活動を中心に報告する。後に掲げた発表例は、生徒がまとめた発表要旨である。

【人物・場面の決定からまとめまでの手順】

- 1 「国語便覧」の平家物語に関する年表と、主要人物の解説を参考にして、発表する人物を選ぶ。その人物の概略、基礎事項を調べる。

- 2 『平家物語』②（小学館『新編日本古典文学全集』）の索引で、人物の登場する該当箇所を探す。

- 3 該当ページを読み、テーマを決定する。

- 4 現代語訳を参照しながら、人物の、その場面での意思や心情、行動について考察を加えまとめる。

- 5 右の考察の根拠となる本文の部分を抜き出し現代語訳を付す。抜き出し部分が必要に感じるが、二カ所以上が望ましいとした。

- 6 場面や人物の要点を示す表題をつける。
【発表の手順】

書画カメラで発表シートを写しながら、口頭

で発表する。発表シートは印刷し配布もする。

聴いている生徒は簡単な感想を用紙に記入する。（主に発表の仕方、まとめ方について記入）

発表例その1 テーマ③

- ・ 見出し語「妻子を愛した夫」
- ・ 選んだテーマ「平維盛は都落ちする時なぜ妻子を残して都落ちしたか」
- ・ 人物についての基礎事項

重盛の長男。平氏の嫡流として若年より重要な役割を果たす。富士川の戦いで総大将になったが戦わず敗走し、清盛の怒りに触れた。翌年尾張国墨俣川すまがわの戦いで源氏軍を破り、従三位になる。その後、越中国砺波山とみやまの戦い、俱利伽羅峠の戦いで義仲軍に惨敗し、都落ちに従ったが、翌年、一門から離れた。那智で入水自殺する。

- ・ 人物の取った行動とその理由（事件の経過）
- ・ 妻子を愛していたけれど、生きて幸せに暮らしてほしいし、慣れない場所ですらい思いをさせたくなかったから妻子を残していった。熊野に隠れて、世をはかなみ仏門に入ったが、悩んだ末に滝に身を投げた。
- ・ 根拠となる本文

1 「いづくまでも具し奉るべけれども、道に敵待つなれば、心やすうとほらん事もありがたし。（中略）そのゆゑは、いかならん人にも見えて、身をもたすけ、をさなき者共をもはぐくみ給ふべし。情をかくる人もなどかなかるべき」

2 「あはれ人の身に、妻子といふものをばもつまじかりけるものかな。此世にて物を思はするのみならず、後世菩提のさまたげとなりける口惜しさよ。只今も思ひ出づるぞや。(後略)」

(巻十 維盛入水 p.313)

発表例その2 テーマ⑤

・見出し語「安徳天皇 外戚の平家に捕われる
都に主なし 代りの天皇を」

・選んだテーマ「なぜ高倉天皇の四の宮(後鳥羽天皇)は、安徳天皇がいる

のに天皇となったと説明され

ているか」

・人物についての基礎事項

安徳天皇は外戚の平家に同行し、三種の神器も平家の元にある。返すように頼むが受け入れてもらえず、ならば代りの天皇を立てようとなった。

・人物のとった行動とその理由

首都である京都に天皇が不在となるのはよくないと、安徳天皇に代わる天皇を踐祚させる必要があった。高倉院の皇子は安徳天皇以外に三人いた。第二・第三皇子と違い、後白河法皇が「こちらへ」という声に遠慮せず、四の宮だけが膝の上に乗る親しみ深かった。法皇は涙を流し、譲位は第四皇子とし、そうなれば、「百代までも日本国の君主であられるに違いない」と判断した。

・根拠となる本文

1 「法皇は仙洞を出でて天台山に、主上は鳳闕をさつて西海へ(中略)既に此京はぬしなき里にぞなりにける。」(巻八 山門御幸 p.97)

2 「高倉院の皇子は、主上の外三所ましましき。二宮をば儲君にし奉らむとて、平家いざなひ参らせて、西国へ落ち給ひぬ。(中略)内々御占

ありしにも、「四の宮位につかせ給ひては、百王まで日本国の御ぬしたるべし」とぞかんがへ申しける。」

(巻八 山門御幸 p.100・p.101)

発表例その3 テーマ⑩

・見出し語「幸か不幸か、生き残った平清盛の娘、建礼門院徳子の波乱万丈な生涯」

涯

・選んだテーマ「建礼門院 平徳子の生涯」

ノ浦のその後」

・人物についての基礎事項

十六才で平家に入内

一一七八 夫の高倉天皇との子、安徳天皇が生まれる

一一八五 壇ノ浦の戦いで入水するが源氏方の右馬允うまじゆう 昵の熊手に髪をかきとられ、助かつてしまう

その後 生き残った宗盛は斬首、時忠は配流されるが、徳子は不問、仏門に入る。(寂光院) 「灌頂の巻」に徳子の心情記述あり

・人物の取った行動とその理由

寂光院にて、後白河上皇と対面。そこで「私は生きながら六道をまのあたりに見た」と述べる。自分の家族である平家は滅び、一人だけが生き残り、大きな悲しみと絶望感を味わったことと思う。「人間界の苦しみはすべて思い知らされた。」と言うように、死ぬよりも辛い思いをしたのではないか。

・根拠となる本文

「あけても暮れても、榮しみさかえし事、天上の果報も、是には過ぎじとこそおぼえさぶらひしか。それに寿永のはじめ、木曾義伸とかにおそれて、一門の人々、住みなれし都をば雲井のよそに顧みて、ふる里を焼野の原とうちながめ、古は名のみ聞きし須磨より明石の浦つたひ(中略)五衰必滅の悲しみとこそおぼえさぶらひしか。人間の事は、愛別離苦、怨憎会苦、共に我身に知られてさぶらふ」

(灌頂の巻 六道之沙汰 p.519・p.520)

まとめ

発表の中には、ここに挙げた他に「判官都落」など、義経系列の場面を取り上げたものもあった。また、弓道への興味から「弓流し」の場面を選んだり、「宇治川の先陣」などの躍動的な合戦場面を選んだりする生徒もいたが、本稿では平家中心にその動向に触れた部分に絞って報告した。なお、八巻の「征夷大將軍院宣」などのように、「語りもの」としては当然のこ